

使徒の働き13章26－41節 「約束されていた復活」

1A ユダヤ人と異邦人への救い 26

2A 罪定めによる預言成就 27－29

3A よみがえられた約束の方 30－37

1B 神の御子としての現れ 30－31

2B ダビデへの確かさと真実 32－37

1C 朽ちない約束 32－33

2C ダビデの子への約束 34－37

4A 罪の赦しの提供 38－41

1B 信仰による義 38－39

2B 嘲る者へ警告 40－41

本文

使徒の働き 13 章を開いてください。私たちの学びは、13 章 25 節まで来ていました。パウロが、ピシティアのアンティオキアのユダヤ人会堂で、福音を語り始めています。彼はユダヤ教のラビであり、その一貫で、奨励のことばをお願いされました。

それで彼が語ったのは、「我々イスラエル人が、先祖の時からずっと待ち望んでいた救い主メシアは、イエスにあった成就した」ということです。エジプトにおいて、イスラエル人たちが贖い出されて民族になってから、主は約束の地に彼らを連れて来られ、ダビデを王として立て、そして、ダビデの子孫からメシアを出すとお決めになりました。そして、旧約時代の預言者の最後の人として、バプテスマのヨハネがいます。

そして、パウロが、福音の核になることを語り始めます。

1A ユダヤ人と異邦人への救い 26

²⁶ アブラハムの子孫である兄弟たち、ならびに、あなたがたのうちの神を恐れる方々。この救いのことばは、私たちに送られたのです。

16 節で、パウロは、説教を始める前に呼びかけていました、「イスラエル人の皆さん、ならびに神を恐れる方々、聞いてください。」ここでも、同じですが、イスラエル人をさらに、「アブラハムの子孫である兄弟たち」と言っています。イスラエル人であることのつながりを強調しています。そして、同じ兄弟であることを強調しています。パウロは、イスラエル人として仲間のイスラエル人に語っているのです。そして、アブラハムへの約束を受け継ぐ者として語っています。

さらに、「神を恐れる方々」というのが、異邦人のことです。ユダヤ教に改宗していないけれども、イスラエルの神を敬っている異邦人です。どちらにも、救いのことばが送られたと強調しています。

2A 罪定めによる預言成就 27－29

²⁷ エルサレムに住む人々とその指導者たちは、このイエスを認めず、また安息日ごとに読まれる預言者たちのことばを理解せず、イエスを罪に定めて、預言を成就させました。

今、彼らは、ピシディアのアンティオキアにいますから、エルサレムは遠く離れたところです。彼らを客体化しています。遠く離れている人々だが、こんなことをしてしまったという感じです。

彼らは、まず、救い主であるイエスを認めなかったのだということです。ここの「認めなかった」は、直訳は「知らなかった」です。イエスは、ユダヤ人指導者たちに言われました。「ヨハ 8:19 あなたがたは、わたしも、わたしの父も知りません。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知っていたでしょう。」彼らは、イエスを物理的に知っていました。けれども、この方が誰であるか走りませんでした。神から来られた方であり、父なる神と一つであられる方です。「知る」というのは、情報ではなく、霊的に知るということです。御霊の働きなしに、私たちは神とキリストを知ることができません。

そして彼らが、「安息日ごとに読まれる預言者たちのことばを理解」していなかった、と言っています。パウロは、コリント人への手紙第二でも、こう語っています。「Ⅱコリ 3:14 しかし、イスラエルの子らの理解は鈍くなりました。今日に至るまで、古い契約が朗読されるときには、同じ覆いが掛けられたままで、取りのけられていません。それはキリストによって取り除かれるものだからです。」

あまりにも数の多くの、キリストについての預言があります。ミカの預言には、イスラエルの支配者が、ベツレヘムから出てくるという預言があります。イザヤ 9 章には、ガリラヤからメシアが現れる預言があります。同じくイザヤには、目の見えない者がみえるようになり、足なえが立ち上がる預言もあります。囚われ人、霊的に束縛された人々、悪霊に付かれた人々を解放する預言もあります。主が来られるのは、ネヘミヤ記で、ペルシアの王がエルサレムを再建しなさいという命令を出して、ダニエルが、62 週また 7 週の後であると預言しました。紀元 30 年頃です。そして、エルサレムにろばの子に乗ってこられる預言を、ゼカリヤが行いました。

そして、預言者イザヤは、イスラエルの民の咎のゆえ、身代わりになって死ぬ、主のしもべについて預言しました。53 章ですね。「53:8 虐げとさばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことか。彼が私の民の背きのゆえに打たれ、生ける者の地から絶たれたのだと。」詩篇 22 篇にも、ダビデが克明に、メシアが十字架の上で苦しむ姿を見て、預言しました。さらに、宗教指導者がこれらのことを行うことまで、詩篇に預言されています。「118:22-23 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。これは【主】がなさったこと。私たちの目には不思議なこ

とだ。」皮肉にも、この方がキリストであるという告白をされたことによって、死刑に定めたのですが、それも、預言の中にあったのです。それを成就させたのです。

²⁸ そして、死に値する罪が何も見出せなかったのに、イエスを殺すことをピラトに求めたのです。

ここが大事な点です。福音書にはすべて、イエスご自身に罪がないという証言が多くあります。総督ピラトがそうでしたが、あの裏切り者ユダまでが、罪のない者を裏切ったことを告白しています。主が十字架の上で息を引き取られた時は、その現場をすべて見ていた百人隊長が、彼を正しい人と証言しました。しかし、ユダヤ人のサンヘドリンの法廷で、イエスを死に決めました。

²⁹ こうして、彼らはイエスについて書かれていることをすべて成し終えた後、イエスを木から降ろして、墓に納めました。

すべてを成し終えた、つまりすべてが神のご計画の中にあったということです。それで、木から撮りおろし、確実に墓に納めました。

3A よみがえられた約束の方 30－37

そして、福音の核心に入ります。

1B 神の御子としての現れ 30－31

³⁰ しかし、神はイエスを死者の中からよみがえらせました。

「使徒の働き」という映画があります。そこでパウロが説教している時に、29 節と 30 節には少し間がありました。「しかし」というところを強調して、パウロの顔の表情も変わりました。そう、ここが彼が良き知らせ、福音としていたのです。正しい方は、死んだままではないのです。そして、イエスは人として死なれたけれども、ただの人ではないのだ、いつまでも生きる方としてよみがえられたのです。

³¹ イエスは、ご自分と一緒にガリラヤからエルサレムに上った人たちに、何日にもわたって現れました。その人たちが今、この民に対してイエスの証人となっています。

福音書には、克明に、よみがえられたイエスが、弟子たちに会われたことが書き記されています。そしてコリント第一 15 章には、同時に五百人に現れたとか、弟子たちに広範囲に現れたことが書かれています。そしてイエスの兄弟であるヤコブにも現れ、パウロ自身にも現れてくださいました。今、なぜ、このアンティオキアのところまで来ているのかというと、これらの人々が、復活のイエスの証人なのだという事です。よみがえられたことを証言しているのです。

2B ダビデへの確かさと真実 32－37

そして、このよみがえりということが、確かに預言されていることを、パウロが論証します。

1C 朽ちない約束 32－33

³² 私たちもあなたがたに、神が父祖たちに約束された福音を宣べ伝えています。³³ 神はイエスをよみがえらせ、彼らの子孫である私たちにその約束を成就してくださいました。詩篇の第二篇に、『あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ』と書かれているとおりです。

ここの二篇の箇所は、表面的に読むと、イエスが神から肉体的に生まれた子であるかのように見えます。しかし、パウロはこれを復活についての預言であるとしています。御子は、永遠の昔から神の御子であり、誕生する前とかいうのは存在しません。そもそも神に造られた被造物ではありません。永遠の昔から父と子の関係があったのです。

ここでの、「**わたしが今日、あなたを生んだ**」というのは、この世界に対して、この方が神の御子であることが明らかにされたということです。パウロはローマ 1 章でこう言っています。「1:3b-4 御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」十字架の死であれば、ローマの時代、数多くの死刑囚が十字架で殺されました。しかし、イエスは違いました。十字架刑で死なれたけれども、よみがえられたのです。このよみがえりによって、確かにこの方が、神の御子であることが現れたのです。

そして、この第二篇を読みますと、この方が父なる神からすべて相続を受けて、諸国の王たちを制し、治める姿が書かれています。この方が、王の王になられるメシア預言になっています。

2C ダビデの子への約束 34－37

³⁴ そして、神がイエスを死者の中からよみがえらせて、もはや朽ちて滅びることがない方とされたことについては、こう言っておられました。『わたしはダビデへの確かで真実な約束を、あなたがたに与える。』

これは、イザヤ 55 章 3 節の預言です。「55:3 耳を傾け、わたしのところに出て来い。聞け。そうすれば、あなたがたは生きる。わたしはあなたがたと永遠の契約を結ぶ。それは、**ダビデへの確かで真実な約束である。**」ダビデへの確かで、真実な約束であり、永遠の契約です。だから、たとえ、滅んでも、再びよみがえらないと、神の国を治めることはできませんから、よみがえりも預言されているのだというのが、次に出てきます。

³⁵ ですから、ほかの箇所でもこう言っておられます。『あなたは、あなたにある敬虔な者に 滅びを

お見せになりません。』

これは詩篇 16 篇からのものです。しかし、ここの「敬虔な者」とは、ダビデ本人ではなく、ダビデの世継ぎの子、ダビデの子のことを指しているのだというのが、次の議論です。

³⁶ ダビデは、彼の生きた時代に神のみこころに仕えた後、死んで先祖たちの仲間に加えられ、朽ちて滅びることになりました。³⁷ しかし、神がよみがえらせた方は、朽ちて滅びることがありませんでした。

ペテロも話しましたが、ダビデの墓が現にあります。彼は、よみがえらなかったのです。それでは、預言が間違っていたのか？というそうではなく、ダビデの子が、死んでもよみがえり、とこしえに治められるということなのです。だから、この方は神の子であり、かつメシア、キリストなのです。

4A 罪の赦しの提供 38－41

こうやって、キリストが死なれたけれども、よみがえられたということを論じた後、パウロは、福音を受け入れるように導きます。

1B 信仰による義 38－39

³⁸ ですから、兄弟たち、あなたがたに知っていただきたい。このイエスを通して罪の赦しが宣べ伝えられているのです。また、モーセの律法を通しては義と認められることができなかったすべてのことについて、³⁹ この方によって、信じる者はみな義と認められるのです。

パウロは、「兄弟たち」と、親愛の心で願い求めています。知ってほしいと願っています。それは、「罪の赦し」です。イエス・キリストが、十字架につけられたのは、私たちの罪が赦されるためでした。ただ主が死なただけであれば、それは、この方が良い行いをした、愛の犠牲だという、人間的な良い話で終わってしまいます。そうではないのですね、よみがえられたことにより、この方が事実、すべての人の罪を赦す、供え物になったのだというのが、明らかにされました。

そして、罪の赦しは、主がエレミヤによって、新しい契約という形で約束を与えていました。「エレ 31:31-34 見よ、その時代が来る——【主】のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破った——【主】のことば——。33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。34 彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼ら

がみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ——【主】のことば——。わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」

ここを読めば、古い契約をイスラエルが破ってしまったことが分かります。それを、パウロは、「モーセの律法を通しては義と認められることができなかったすべてのこと」と言っています。けれども、イエスの流された血によって、罪が赦されました。それが、エレミヤの預言では、「わたしが彼らの不義にあわれみをかけ、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」と約束されています。

そして、このことが実現するのは、信じることによってなのだということです。パウロが、ロマ書で論じていますが、信仰による義については、ハバククによって預言されています。「正しい人は、その信仰によって生きる。(2:4b)」この方に信頼を寄せることによって、正しい人とみなされます。

2B 嘲る者へ警告 40-41

⁴⁰ ですから、預言者たちの書に言われているようなことが起こらないように、気をつけなさい。⁴¹ 『見よ、嘲る者たち。驚け。そして消え去れ。わたしが一つの事を あなたがたの時代に行うからだ。それは、だれかが告げても、あなたがたには信じがたいことである。』

今、ハバククの預言に、信仰による義が啓示されていることを話しましたが、パウロは、同じ、ハバクク書にある警告の言葉を引用しています。1 章 5 節で、上の言葉が神から与えられていました。信じがたいことだとして、バビロンが用いられて、ユダの悪が裁かれることを神は明かされます。同じように、今、ユダヤ人の指導者がイエスを罪に定めることによって、それがかえって神の救いの計画が成し遂げられ、さらに神がこの方をよみがえらせたということは、信じがたいことかもしれません。けれども、確かに神の約束として預言者たちに与えられていたのです。ですから、信じがたいこととせず、嘲ることなしに、受け入れなさいと警告しているのです。

多くの説教は、このように、最後、二つの道を示します。モーセも、申命記の最後の説教で、いのちの道を示しました。イエスご自身が、山上の説教で、狭い門と、滅びに至る広い道を示されました。また、みことばを聞いているのに行わない者は、砂の上に建物を建てており、行っている者は岩の上に建て物を建てます。こうやって二つの道があるのだよ、と、はっきりと示しています。どちらかを選びなさいという問いかけです。

グレッグ・ローリーという伝道者がいます。彼は、映画「ジーザス・リボルーション」の主人公です。ロニー・フリズビーという、元ヒッピーの伝道者がいました。自分の高校にやってきて説教をしました。それは、「あなたは、イエスの味方になっているか、あるいは反対者になっているかのどちらかだ。」と言いました。彼は自分は中立だと思っていましたが、イエスに自分が主として明け渡していなければ、実はイエスに敵対しているのだと悟ったそうです。それで、決心に導かれました。このよ

うに、どちらかしかないのだよ、あいまいにできないのだよ、ということです。

次回は、この説教の後に、人々がどう反応したか？を見ていきます。まさに、真っ二つに分かれました。